

特別の教科 道 徳



【授業改善に向けて】 ----- 道徳 1

【学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた道徳科の実施のために】 ----- 道徳 2

【実践事例 1】 ----- 道徳 3

第 4 学年 主題名「自分に正直に（A-2：正直，誠実）」
（教材名 ぼくは MVP）

【実践事例 2】 ----- 道徳 8

第 4 学年 主題名「社会のきまり（C-11：規則の尊重）」
（教材名 雨のバス停留所で）

< 道 徳 >

【授業改善に向けて】

1 主体的・対話的で深い学びについて

(1) 主体的な学び	-----	自己を見つめ、道徳的価値に関する事象を自分自身の問題として受け止め、解決しようとする意欲をもつ
(2) 対話的な学び	-----	他者と対話したり協働したりしながら物事を多面的・多角的に考える
(3) 深い学び	-----	学んだ価値に照らして自分を見つめ、自己の生き方についての考えを深める

このような学びが実現するためには、質の高い多様な指導方法が求められる。例えば、「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」では、指導方法の一例と断った上で、以下の指導方法を示している。

- 読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした指導
- 問題場面における道徳的価値の意味を考えさせる指導
- 道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れた指導

実際には、これらの指導方法を主題や学級の実態に応じて用いること、または組み合わせて用いることが大切である。

2 授業改善の視点

道徳科としての授業実践は、これまでの道徳の時間にはない「多面的・多角的な観点から、道徳的問題場面をとらえ、考え判断し、自分との関わりの中で道徳的理解を広げたり、深めたりしていく」ことが大切である。そのために、次の視点から授業改善に取り組んでいきたい。

〈視点1〉多面的・多角的に考えさせるための工夫

- 発問構成の工夫
- 板書の工夫
- 教材分析の工夫
- 登場人物に自我関与していくこととの整合性
- ※ 教材の問題場面を構造的にとらえ、板書や発問構成に生かすこと
- ※ 多面的・多角的に考えさせる発問により児童の思考を拡散させず、効果的に主人公に自我関与できるようにすること

〈視点2〉問題解決的な学習、体験的な学習を取り入れた指導過程の工夫

- 葛藤を可視化できる教材・教具の工夫
- 動作化・役割演技の導入
- 場面絵・写真・イラスト等の活用
- ※ 葛藤や感動を可視化できるようにして、児童相互に共有できるようにすること
- ※ 動作化・役割演技や場面絵・写真・イラスト等の活用目的を本時のねらいとの関わりから明確にして、効果的に導入すること

〈視点3〉言語活動の充実

- 協働的に議論する場の設定
- 学習形態の工夫
- 日常場面との関連付け
- ワークシートの工夫や道徳ノートの活用
- 振り返りの場の設定
- ※ 「書くこと」「聞くこと」「話すこと」を授業の中に位置付け、言語活動が日常的に行われるようにすること

〈視点4〉評価の工夫

- 評価の視点の明確化と指導過程への位置付け
- ※ 毎時間の評価の視点を定め、記録を累積していくこと
(展開前段) 教材の問題場面を一面的な見方から、多面的・多角的な見方へと発展させているか。
(展開後段) ねらいとする道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。

【学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた道徳科の実施のために】

1 学習指導要領の改訂について

道徳教育は、学習指導要領の一部改正(平成27年3月27日)により、小学校では平成30年度から、「特別の教科 道徳」(以下、道徳科という)を中心に、学校の教育活動全体を通じて行うことになっている。道徳教育における道徳科の授業の位置付けは、次の点で改訂されている。

- (1) 道徳教育の目標と道徳科の目標が、「道徳性を養う」ということで統一されたこと。
- (2) 道徳科における児童の学習状況及び成長の様子について評価すること。

2 新学習指導要領を実施する上で留意すべきこと

道徳科の評価にかかわる目標のとらえ方

今回の改訂により、道徳科の目標を、次のように整理しておきたい。

＜道徳科の目標＞

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断、心情、実践意欲と態度を育てる。

- (1) 道徳的諸価値についての理解を基にする。
道徳的価値の意義及びその大切さを理解する。
 - 人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解する。
 - 道徳的価値を実現することができない人間の弱さを理解する。
 - 道徳的価値の実現についての感じ方・考え方は多様であることを理解する。
- (2) 自己を見つめる。
道徳的価値を自分とのかかわりでとらえる。
 - 自分の経験やその時の考え方、感じ方と照らし合わせる。
 - 更に考えを深める。
- (3) 物事を多面的・多角的に考える。
 - 他者と対話する。
 - 他者と協働する。
- (4) 自己の生き方について考えを深める。
これまでに形成された道徳的価値観から、自己の生き方について考えを深める。
 - 道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止めることができるようにする。
 - 他者との関わりから自分の特徴を知り、伸ばしたい自己を深く見つめる。
 - これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深める。
- (5) 道徳的な判断、心情、実践意欲と態度
道徳性の諸様相を表すが、分析的にとらえようとすることは妥当でない。

3 道徳科における評価

(1) 評価の方法

学習指導要領解説では、評価の方法として、次のような記述が見られる。

道徳科の評価に当たっては、目標に掲げる学習活動における児童の具体的な取り組み状況を、一定のまとまりの中で、・・・＜中略＞・・・児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行うことが求められる。

(2) 評価の内容

- 学習指導要領解説では、具体的な取り組み状況(児童の学習状況)や児童の成長の様子(道徳性にかかわる成長の様子)について、次のように例示されている。
 - ① 児童の学習状況
 - ・ 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか。
 - ・ 道徳的な価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。
 - ② 道徳性に関わる成長の様子
 - ・ 特に記述は見られない。

【実践事例 1】第 4 学年 主題名 自分に正直に A－（2）正直，誠実

1 ねらいと教材

- 自分に不利になることでも，自分を偽らないで正直に行動しようとする心情を育てる。
- 「ぼくは MVP」 光文書院

2 主題設定の理由

（1）ねらいとする道徳的価値について

本主題は，中学年の内容項目 A－（2）「過ちは素直に改め，正直に明るい心で生活すること。」を中心的に扱っている。児童が健康的で積極的に自分らしさを発揮できるようにするためには，自分の気持ちに偽りのないようにすることが求められる。また，自分の過ちを認め，改めていく素直さとともに，何事に対しても真面目に，明るく楽しい生活を心掛けようとする姿勢をもつことが大切である。

過ちや失敗は誰にでも起こり得ることであり，そのことで自分自身が責められたり，不利な立場に立たされたりすることを回避しようとしてうそを言ったり，ごまかしをしたりすることがある。このことによって他者の信頼を失うばかりか，自分自身の中に後悔や自責の念，強い良心の呵責などが生じる。それらを乗り越えようとするのが正直な心であり，自分自身に対する真面目さであり，伸び伸びと過ごそうとする心の清々しい明るさでもある。このような誠実な生き方を大切にする心を育てていこうとするものである。

（2）児童について

本学級の子どもたちは，「ふれあい係」を中心に学級の間が一緒に遊べる遊びを考えたり，係活動の計画を立てて自主的に取り組んだりする姿が見られるようになってきている。しかし，みんなで確認し合って始めたはずの遊びのルールを，中心となって活動している一部の子どもたちが自分たちの都合のいいように変えたり，係の仕事をしらずに遊びに行ったことを「知らなかった。」「自分の役割は終わっている。」とごまかしたりするようなことも見られる。うそをついたり，ごまかしたりすることはいけないことと分かっているのに，友達のうちやごまかしを厳しく批判したり，指摘したりする。その反面，自分自身が不利になりそうになると逆にうそをついたり，ごまかしたりしようとすることがある。

（3）教材について

主人公の「ぼく」はドッジボールをしているときに，相手が投げたボールが足にかすってしまう。「ぼく」は自分がアウトになって外野に出るかどうか迷うが，友達に「こうちゃん，早く，早く。ボールが来ちゃうよ。」と促されてそのままゲームを続ける。そして，自分の活躍でチームが大逆転し，「きょうの MVP，こうちゃん。」ともてはやされる。しかし，「ぼく」は一人だけ気が重く，「何かとんでもないことをしてしまったのではないか。」という気分になってしまう。「正直に言うことは大切だ。」と分かっているのに，なかなか言い出せない主人公の心の葛藤をよく表している資料である。

本学級の子どもたちもドッジボールが大好きで，休み時間やクラスのイベントでもよくやる遊びの一つである。誰もが勝敗にこだわる時期であり，「当たった」「当たってない」のやり取りも多い。そのため，主人公の葛藤にも共感しやすく，自分と重ね合わせて考えるのに適した教材であるといえる。

（4）指導について

〈視点 1〉多面的・多角的に考えさせるための工夫

- 正直に言うこと，行動することが大切だと漠然と考えている子どもたちに対して，「誰

も気付いていないのだから気にすることはないのでないか。」「今さら本当のことを言わなくてもいいのではないか。」ということについて、子どもたちの心を揺さぶる発問をする。この発問をすることにより、「確かにそうだな。」「今はよくてもいつまでも心の中に嫌な気持ちが残る。」という相反する考えを出し合わせることで、うそやごまかしはその場をやり過ごすことはできても、自分の中に後悔や自責の念が残ることを話し合いの中から気付かせるようにしたい。そして、正直・誠実に行動することにより、明るい心で、のびのびとした生活が送れることを感じ取れるようにしたい。

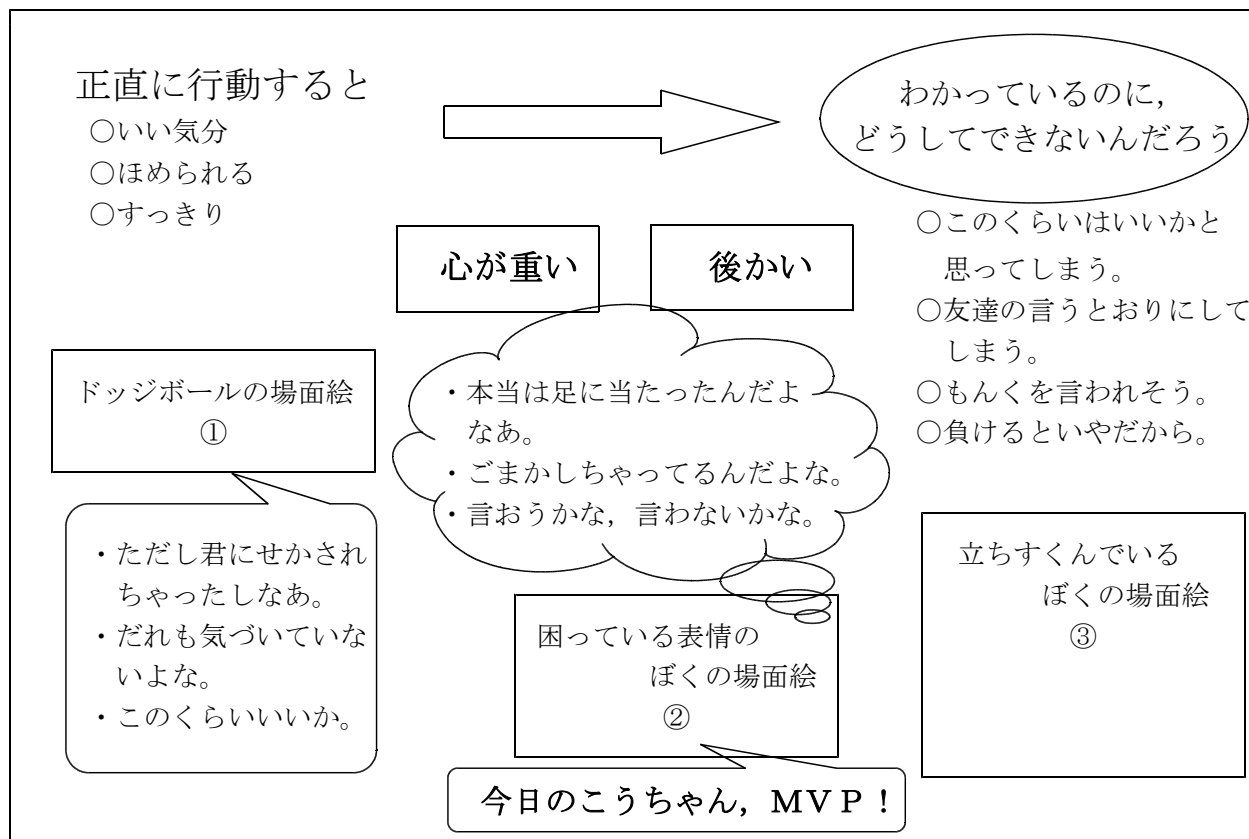
〈視点3〉言語活動の充実

- 主人公「ぼく」のように迷いながらも正直に行動できなかったことや自分の良心にしたがって行動できたことを想起させ、自分のこれまでの生活を見つめ直し、これからどのように生活していきたいかを考えさせるようにする。また、本時の学習を生かして「正直に生きる」とはどのように生きていくことなのかについても考えさせるようにしたい。これらの振り返りは道徳ノートに書くようにする。
- また、正直に生きるとはどういうことかについて考えたことを、数名に発表してもらい、「正直に生きる」という友達の考えに触れることで考えを広げられるようにする。

〈視点4〉評価の工夫

- 教材の問題場面を一面的な見方から、多面的・多角的な見方へと発展させる姿が見られた時、成長の様子がとらえられるときに評価するものとする。また、ねらいとする道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深める姿については、授業中の話合いの様子や道徳ノートに書かれた内容をもとに毎時間評価するものとする。

3 板書案



4 展開の具体例（1／1時）

学習活動・内容	時間	○ 指導上の留意点 ※評価 <視点>
1 「正直」な言動をとった時、どんな気持ちになるかを考える。 「正直」に話したり、行動したりするとどんな気持ちになるか。 ・ 正直に話すとほめられるからうれしくなる。 ・ ごまかさないで行動するとすっきりする。	5	○ 正直な言動をとった時の気持ちを考えさせることにより、価値への方向付けを図る。 正直な言動は自分自身の心をすっきりさせるものという意見をたくさん出させることにより、分かっているのに、主人公も自分たちもどうして正直に行動できないことがあるのかということを考えるためのきっかけとする。
2 教材「ぼくはMVP」を読み、話し合う。 (1) 「今日のMVP、こうちゃん」と言われて、心が重かったのはなぜか。 ・ ごまかしているから。 ・ 本当は足に当たっているのに、それを隠したまま試合を続けたことがつらいから。 ・ 言おうか言わないか迷っているから。 (2) みんなは分かっているのだから、本当のことを言う必要はないのではないか。 ・ 試合は終わったんだから、今さら言う必要はない。 ・ 言ったほうがすっきりするから言うべき。 ・ このまま言わないともやもやし続ける。 (3) 正直に行動すると気分がいいとわかっているのに、どうしてできないのだろう。 ・ その時の状況で、友達に流されてしまう。 ・ 勝ち、負けがかかっているときは、正直に言って負けると嫌だから。 ・ 自分が損することになるかもしれないから。	20	○ 外野へ出ず、夢中になってドッジボールを続けたものの、「ぼく」の心には後ろめたい気持ちがあったことに気付かせる話し合いを展開するよう、「MVPと言われて最高の気分だね」「一人だけ残るなんてカッコいいよね」など、子どもたちの心を揺さぶるようにする。このことにより、「いや、最高の気分じゃないはず」「カッコいいけどすっきりしないと思う」などの考えに理由付けをさせながら話し合いをするようにする。 ○ 「ボールが当たったことを隠しているのがつらい」「ごまかしているのは悪いこと」と、正直に言うことが大切だと漠然と考えている子どもたちに、「誰も気付いていないのだから気にすることはないのではないか。」「今さら本当のことを言わなくてもいいのではないか。」と揺さぶりをかける。この発問により、うそやごまかしはその場はやり過ごせても、後々まで後悔や自責の念が生じることを深く意識させるようにしたい。 <視点1> ○ 正直に行動することは大切なことと分かっているのに、主人公の「ぼく」も自分たちもどうして正直に行動できないことがあるのかを考えさせる。友達集団の中にいるとその時の状況や人間関係によって正しい行動がとれず流されてしまうこと、過ちを認めることで自分が不利になるようなことが起こってしまうことなど、自分の利害損得を考えたときに正直で誠実な言動が取れなくなってしまうことに気付かせるようにしたい。しかし、その結果自分の心に重荷を背負って、苦しむことを意識付けるようにしたい。
3 今までの自分は正直・誠実に生活してきたかを振り返り、学習ノートに書く。 (1) これまでの自分は正直に生活してきたか。 (2) 「正直に生きる」とはどのように生きることか。	15	○ 主人公「ぼく」のように迷いながらも正直に行動できなかったことや自分の良心にしたがって行動できたことを想起させ、自分のこれまでの生活や行動を見つめ、これからはどのように生活していきたいかを考えさせるようにする。また、本時の学習を生かして「正直に生きる」とはどのように生きることかについても考えさせるようにする。 <視点3> ○ 道徳ノートに書かれた数名の考えを紹介し、正直に生きるとはどういうことかについて、自分とは違った考えに触れさせることで、それぞれの考えを広げられるようにする。 <視点3> ※ 正直に生きるとはどういうことかについて考え、過ちや失敗をごまかさないで正直に行動しようとする。 (ノート、観察・発表) <視点4>
4 教師の話を聞く。 正直に行動できなくて、後悔していることについての話を聞く。	5	○ 正直に行動することは大切と分かっているのに、その時の状況や相手によって正直に行動できないこともある。迷ったあげく、正直に行動できなくて今でも苦しい思い出として残っている教師の体験談を話し、正直に行動する心情を育て、実践意欲を図っていききたい。

5 実践の考察（成果：○ 課題：●）

〈視点1〉多面的・多角的に考えさせるための工夫

「誰も気付いていないのだから気にすることはいいのではないか。」「今さら本当のことを言わなくてもいいのではないか。」「これから言うと大変なことになってしまう。」など、子どもたちの正直に言うことが大切だという心を揺さぶるように発問し、本当にそうなのか、じっくり自分の心に問いかけ、自分の考える正直について見直すことができるようにする。

- T：「ぼく」はボールが足をかすったのに、外野に出ずそのまま試合を続けたのはなぜ？
- C：「まっ、いいか」という気持ち。
- C：このくらいは大したことはないと思ったのだと思う。
- C：でも、それはよくないよ。ずるしてる。
- C：出ようとしたけど、友達にせかされて言いそびれたんだと思う。



「正直に行動するとは」について話し合う姿

- 正直に言うこと、行動することは大切だという気持ちはもっているが、自分が置かれている状況や友達からの言葉かけによってその気持ちは薄らいでしまう。自分の勝手な判断で「このくらいはいいか」とごまかしてしまったり、「友達がせかすからいいそびれた」と人のせいにしたりはすることは本学級の子どもたちにもよくあることである。正直という価値をどのようにとらえ、どのように行動してきたかを振り返るための方向付けを行ったことで、「わかっているけど行動できない」心の弱さについてじっくり考えるきっかけとなった。

- T：みんなは「ぼく」にボールが当たったことに気付いていないのだから、気にすることはいいのではないか？
- C：ドッジボールの試合は終わったのだから、言う必要はない。
- C：今さら言っても、みんなに責められるから言うのはやめたほうがいい。
- C：でも、その場はいいけど、後々まで気掛かりだ。
- C：いつまでも心に残るから言ったほうがいい。
- C：このまま言わないともやもやする。
- C：言ったほうがすっきりする。
- T：正直に行動すると気分がいいとわかっているのに、どうして人間はできないことがあるんだろう。
- C：このくらいならいいかと思ってしまう。
- C：友達に責められると思うと本当のことが言えなくなる。
- C：その時の状況で流されてしまう。心が弱い。

- 正直に行動することは大切なこととわかっているけど、そのときの状況や相手によって行動に移せない心の弱さがあることが話合いの中から見えてきた。「今さら言う必要はない」「友達に責められる」という考えが多く、その場を乗り切るためのうそやごまかしを軽く考えている子どもも少なくない。迷わず行動に移せるような価値に対する思いの深まり、どうすればよいかを考えて判断し、行動できる力を高めていく必要があると感じた。

〈視点3〉言語活動の充実

主人公「ぼく」のように迷いながらも正直にできなかったことや自分の良心に従って行動できたことを想起させ、自分のこれまでの生活を見つめ直し、これからはどのように生活していきたいかを道徳ノートを使って、表現させるようにする。

T：「ぼく」のように迷いながらも正直にできなかったこと、正直にできたことはありますか？

C：弟を泣かせた時に、お母さんに怒られると思って「弟が先に嫌がらせをした。」と言ってしまった。本当はぼくが、弟がやっていたゲームを横取りした。弟が「お兄ちゃんが。」と言ってばれたらどうしようとはらはらしていた。こんなことでうそなんかつくんじゃなかったと思った。

C：食器棚からお皿を出そうと思ったら、お皿が落ちて割れてしまった。お母さんが仕事から帰ってきたときにすぐに話したら、「けがしなかった。」と聞いてくれた。お皿を割ってしかられるかと思ったのに、なんだかいい気分になった。

C：宿題をやらなかった時、「昨日はおじいちゃんの家に行ったのでできなかった」と先生に話したら、「学校から帰ってから時間あったでしょ。」と聞かれた。何とかごまかそうと思って、「学校から帰ってすぐ出かけて、夜9時頃帰ってきた。」と話すと、「さっさとやればすぐ終わる宿題だったんだけどな。」と言われた。友達に「〇〇ちゃん、昨日自転車に乗ってどこかへ行ったよね。」と言われて心臓がドキドキした。それから、わたしは宿題をやらなかった時は、うそをつかないで謝るようにしている。はらはらしなくて正直に言うほうがいい。

- 迷いながらも正直に行動できなくて失敗したことや良心にしたがって行動して清々しかったことなどを想起し、自分のこれまでの生活を振り返ることができた。失敗したときのもやもやした気持ちや後悔や正直に行動してスッキリした思いを話し合うことで、これからはどのように生活していきたいかを考えることができた。
- 「正直に生きる」とはどのように生きることかについて考え、道徳ノートに自分の思いを書いた。1時間の中で、自分の価値に対する気持ちがどのように変わったのか、友達と話し合うことで高まりはあったのか、一人一人の変容のとらえが見えるノートづくりを指導していきたい。



道徳ノートに振り返りを書く姿

＜視点4＞ 評価の工夫

教材の問題場面を一面的な見方から、多面的・多角的な見方へと発展させる姿が見られることを成長の様子ととらえ評価していく。また、ねらいとする道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深める姿については、授業中の話合いの様子や道徳ノートに書かれた内容を基に毎時間評価する。



「正直に生きる」ことについて
ペアで話し合う姿

T：正直に生きるとは？

C：ごまかしをしないで生活することだね。

C：分かっているけどできない時もあったな。

C：でも、あとあとまで気掛かりでいるよりは、本当のことを正直に言ったほうがいいね。



これまでの自分について振り返る姿

C：今まではできないこともあったけど、これからはできるような気がする。

○ 話合いや道徳ノートへの振り返りをするすることで、正直に行動することの清々しさを改めて感じる事ができた。

（文責 武澤 ひろみ）

【実践事例2】第4学年 主題名 社会のきまりC－（11）規則の尊重

1 ねらいと教材

- 周りの人のことを考えてルールやマナーを守ることの大切さを理解し、進んで守ろうとする意欲を高める。
- 「雨のバスでいりゅう所で」 光文書院

2 主題設定の理由

（1）ねらいとする道徳的価値について

本教材は、中学年の内容項目C－（11）「約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守る」ことを中心的に扱っている。きまりは、集団生活を営む上でなくてはならないものであり、きまりを守り合うことで、集団生活は円滑に営まれていく。この段階では、気の合う仲間できまりをつくり、自分たちで決めたことを大切にする傾向がある。そのような発達段階を生かし、一般的な約束や社会のきまりについて理解し、それらを守るように指導していくことが大切である。きまりを守って生活していくことは、ある意味では、他者への思いやりとも考えられる。きまりを守ることで、みんなが安全にそして快適に生活することについて気付かせていく必要がある。

（2）児童について

本学級の児童は、約束や社会のきまりを守ることは大切だとわかっているが、実生活においては自分の都合で行動したり自分勝手な解釈で生活してしまったりすることが見られる。約束や社会のきまりを守ろうとする児童もいるが、なぜ約束や社会のきまりを守って生活することが大切なのかを理解しているとは言い難い。この学習を通して、マナーを守ることやきまりの意義についてよく考え、約束や社会のきまりを守って行動しようとする心情や意欲を育てていけるようにしたい。

（3）教材について

風も伴う大雨の日の停留所で、早くバスに乗りたと思った主人公が、先に来ていた人たちを抜いて先頭に並び、バスに乗ろうとしてしまったというものである。一緒にいた母親に無言で強引に連れ戻され、列に並んでバスに乗るが、すでに座る席はない。主人公は腹立たしい気持ちになるが、いつもは優しい母の顔が全然違う様子であることに気付き、自分がとった行動について考え始めるという子どもたちにとって似たような事が日常に起こりうる内容である。

主人公に共感しながらも、母親や軒下に並んでいる人たちから見た主人公の自己中心的な気持ちにも共感させることで、マナーを守る意義について考えることに適した教材である。

（4）指導について

＜視点1＞多面的・多角的に考えさせるための工夫

- バス停で、よし子が先に来ていた人たちを抜いて先頭に並んだ時の、よし子の気持ち、それを見ていた母親、軒下に並んでいる人たちのそれぞれの気持ちを考えさせることにより、周りの人のことを考えてルールやマナーを守る意義について考えを深められるようにする。

＜視点2＞問題解決的な学習、体験的な学習を取り入れた指導過程の工夫

- 教材を読む前に、道徳的問題場面の場面絵を提示することで、問題場面を焦点化し、問題場面を豊かにとらえられるようにする。

＜視点3＞言語活動の充実

- きまりを守った時に周りの人のことを考えてきまりを守ろうとしていたかワークシートに書かせることで、ねらいとする価値について自分自身を見つめることができるようにする。

3 展開の具体例（1／1時）

学習活動・内容	時間	○指導上の留意点 ※評価 <視点>
1 きまりやルールに対してのアンケートの結果を知る。	5	○ アンケートの結果をまとめたものを提示し、学級の中でのきまりやマナーに対する意識を大まかにとらえることで、ねらいとする道徳的価値への方向付けを図る。 アンケート：ルールやマナーは何のためにあると思いますか。
2 教材「雨のバスでいりゅう所で」を読み、話し合う。 (1) よし子は、どんな思いで一番にバスに乗り込もうとしたのか。 ・大雨だから早くバスに乗りたい。 ・早く座りたい。 (2) 軒下に並んでいる人たちはよし子の行動をどう思ったか。 ・何で先に行くんだ。先に並んでいたのに。 ・順番を守らないなんてずるい。 (3) よし子はバスの中で、お母さんの横顔を見ながらどんなことを考えていたのだろうか。 ・私が先に並んだことを怒っているんだ。 ・自分のことしか考えていなかった。 ・待っている人のことを考えていなかった。	20	○ 教材の状況をつかみやすくするために、道徳的問題場面の場面絵を提示し、場面や状況を押さえてから資料の読み聞かせを行うことで、問題場面を豊かにイメージできるようにする。 <視点2> ○ 雨でつまらない気持ちでいる中でやっとバスが来てバスに早く乗りたいというよし子の自己中心的な気持ちに共感させる。 ○ 軒下に人が並んでいたという状況はどういうことなのかを考えさせ、ここにはどんなきまりがあるのかに気付かせる。その後、軒下に並んでいる人たちの気持ちを考えさせることにより、周りの人のことを考えてルールやマナーを守ることの大切さに気付かせていく。 <視点1> ○ どうしてお母さんは黙っていたのだろうかという補助発問をし、違反のことを教えなかった理由を問い返すことで、自分で考え改めてほしいという母の願いに気付かせていく。また、完全なきまりではないことも、人として守るべきマナーがあることやそれによってみんなが気持ちよく過ごすことができることに気付かせていく。
3 自分自身を振り返る。 ○ 自分の生活を振り返り、ワークシートに書く。 ・きまりを守った時に、周りの人のことを考えていたか。	15	○ きまりを守ったときに周りの人のことを考えてきまりを守ろうとしていたかワークシートに書かせることで、ねらいとする価値について自分自身を見つめられるようにする。 <視点3> ※ 周りの人のことを考えてマナーやきまりを守るものの大切さについて気付くことができたか。 (ワークシート・発言)
4 教師の説話を聞く。	5	○ きまりを守れなくて周りの人に迷惑をかけた経験을話し、道徳的实践への意欲付けを図る。

4 実践の考察（成果：○ 課題：●）

〈視点1〉多面的・多角的に考えさせるための工夫

バス停で、よし子が先に来ていた人たちを抜いて先頭に並んだ時の、よし子の気持ち、それを見ていた母親、軒下に並んでいる人たちのそれぞれの気持ちを考えさせることにより周りの人のことを考えてルールやマナーを守る意義を多面的・多角的に考えられるようにする。

T：先頭に並んだよし子さんはどんな気持ちだったのかな。

C：やったあ。1番になれた。

C：1番に並べて早く席に座れそう。

C：後ろの人はどうでもいいや。

C：お母さんはなんで前にこないんだろう。

T：なるほど。お母さんもくればいいのにね。

T：その後、お母さんがぐいっと引っ張ったんだね。引き戻されたとき、よし子さんはどんな気持ちだったかな。

C：なんで。

C：早く席に座りたいのに。

T：そうだよな。早く座りたいんだよね。

C：離して。早く乗りたいのに。

C：早くしないとぬれちゃう。

T：そうだよな。雨が強いんだよね。風も吹いているしね。



場面絵を見ながら話し合う姿

T：周りには雨宿りしながらバスを待っている人たちがいたよね。よし子が先頭に並んだとき、どんなことを思ったかな。どんな気持ちだったかな。

C：なんで抜かされなくちゃいけないの。

T：抜かしたの？抜かされたと思った？

C：抜かしていったというか。

T：並んでいたわけではないよね。バス停じゃないからね。

C：走っていったから抜かしたんじゃない。

T：（場面絵を指さしながら）ここで並んで待ちましょうというのはルールかな。

C：違う。

T：でも先に並んでいたんだよね。

C：普通はその人が先に乗る。

T：一緒にいたお母さんは、よし子が先頭に並んだとき、どんな気持ちだったのかな。

C：みんなの迷惑になる。

C：はやくとめないと。

T：どうして。

C：みんなの迷惑になる。他の人に怒られちゃう。

C：早く戻ってきなさい。

T：どうして。

C：ちゃんと並んでいるんだから、自分だけ1番に行ったら好き勝手やってることになっちゃう。

C：自分さえよければってなると、他の人に迷惑かかっちゃう。他の人の事を考えなくちゃいけない。

T：自分さえよければってなってるの？

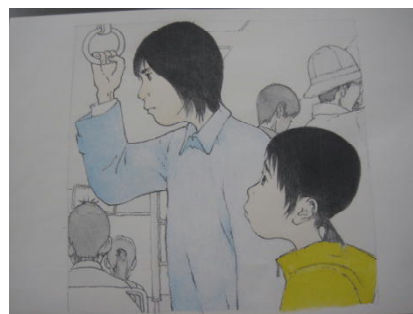
C：自分勝手。人の事、考えてない。

- よし子の気持ちを考えた後、それを見ていた軒下に並んでいる人たちや母親のそれぞれの気持ちについてしっかり考えさせたので、多面的・多角的に考えさせることができ、ねらいにせまることができた。
- より多面的・多角的に考えさせるためには、発問構成だけでなく、考えを比較できるような板書構成を工夫していくことが大切である。

〈視点2〉問題解決的な学習、体験的な学習を取り入れた指導過程の工夫

教材を読む前に場面絵を提示することにより、ねらいとする道徳的価値を焦点化し、子どもたちに解決しなければならない問題場面を豊かにイメージさせることができるようにする。

- T：(場面絵を提示しながら) 主人公はよし子さん。なんか浮かない顔をしているね。どんな感じかな。
- C：泣きそう。
- C：しょぼんとしている。
- T：隣にいるのはよし子さんのお母さん。
- C：怒ってる。
- T：そうだね。どうして怒っているのかな。何があったのかな、というのを考えながら聞いてね。



道徳的問題場面の場面絵

- 教材を読む前に道徳的問題場面の場面絵を提示したことにより、子どもたちが問題場面についてしっかり考えながら教材の読み聞かせを聞くことができた。
- 教材を読んだ後に、何があったのか発問し確認すれば、もう少し豊かに問題場面をイメージさせることができたのではないと思われる。

〈視点3〉言語活動の充実

ルールやマナーを守ったときに周りの人のことを考えて守ろうとしていたかワークシートの書かせることで、ねらいとする価値について自分自身のことを見つめることができるようにする。

- T：自分のことを振り返ってもらいたいんだけど、(アンケートの結果を指しながら) ルールやマナーを守れている人が多いんだけど、周りの人のことを考えてルールやマナーを守っていたかどうか振り返ってね。周りの人のことを考えていたかな。
- C：バスに乗ったことない。
- T：バスの中のことでなくていいよ。学校生活のこと、おうちでのことでもいいよ。ルールやマナーを守った時、周りの人のことを考えていたかな。詳しく書いてみてね。
- C：それぞれワークシートに記入。

- T：発表してもいいよという人いますか。
- T：挙手した中から2名指名し、発表させる。



自分自身を振り返る姿

- ワークシートを活用し、書かせる視点を明確にしたことで、これまでの自分について振り返ることができた。
- 書いたことについて読み返したり付け加えたり思い返したりして、さらにしっかり振り返ることができるように、時間を確保し働き掛けていく必要がある。

(文責 高橋 玲子)